

知求会ニュース

2017年4月

第61号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

張 婷婷(国際学研究専攻・8期生)さんと仲田和正(国際学研究専攻・3期生)さんが、2017年3月24日(金曜日)に昨秋授与されたスバゴジョエワ アセリさんに続いて第19号・第20号の博士号学位を授与されました。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学) 3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)・博士(人文学)(パリ東大学)・博士(芸術学)(筑波大学)・博士(社会学)(一橋大学)・博士(農学)(東京農工大学連合大学院) 2名・博士(国際学)(宇都宮大学) 13名・博士(経済学)(名古屋市立大学)・博士(観光経営学)(慶熙大学校)・博士(人間・環境学)(京都大学)・博士(学術)(杏林大学) / (筑波大学) 2名の計27名です。

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2017(平成29)年3月24日(金曜日)午後1時10分から5号館A棟4階大会議室にて、2016年度学位記授与式が開催されました。

今回の修了者は、国際社会研究専攻の第16期生の伊藤和也さん・亀井俊明さん・倪欣萌さん、第17期生の王曉蕾さん・鈴木大史さん・霍達さん・楊堯さんの7名でした。国際文化研究専攻の第17期生の今野善伸さん・趙王寧娜さん・張微さん・陳心宿さん・鄭全嬌さん・羅霄さん・劉晶洋さん・梁鎮輝さん・林佳儒さんの9名でした。国際交流研究専攻の第10期生の力田萌瑞さん、第12期生のANKOUSSOU MPIGA SILVA ALEXIAさん・于慧さん・VARGAS VILLALOBOS, RONY JOSEさん・王瀟さん・韓雯婷さん・NAKCHAVEE NATHIRAさん・賓帝垂さん・柳田文さん・李園さんの10名でした。計26名でした。

◎ 佐々木一隆国際学研究科長・国際学部長選出

佐々木一隆先生が4月1日から任期2年間で選出されました。詳細は国際学部だよりの掲載記事6を参照して下さい。

◎ 教職員人事異動

今井 直名誉教授

地球社会形成研究講座所属の今井直先生が、3月31日をもって定年退職されました。宇都宮大学には1995年から21年間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。

佐々木史郎名誉教授

地球社会形成研究講座所属の佐々木史郎先生が、3月31日をもって定年退職されました。宇都宮大学には教養学部時代を含めて1993年7月から23年9ヶ月間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。

渡邊直樹名誉教授

地域文化形成研究講座所属の渡邊先生が、3月31日をもって定年退職されました。宇都宮大学には教養学部時代を含めて1983年から34年間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。

中里正芳さん

国際学部事務長補佐の中里さんが4月1日付で監査室に異動されました。中里さんは国際学部には9か月間在籍されていました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されてこられました。短い在籍期間でしたが本当にお疲れ様でした。後任には、元・教育学部事務長の上原弘さんが専門職員として着任されました。

◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	0名	・社会人	0名	・外国人	4名	計	4名
国際文化研究専攻	一般	2名	・社会人	0名	・外国人	4名	計	6名
国際交流研究専攻	一般	0名	・社会人	1名	・外国人	5名		
			国際交流	・国際貢献活動経験者	0名		計	6名
							合計	16名

◎ 平成28年度 第2回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2017(平成29)年2月20日(月)午後4時から、宇都宮大学本部棟3階 第2会議室にて、平成28年度第2回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は石田朋靖学長・藤井佐知子理事・久保進理事・佐々木一隆 国際学部長代理・伊東明彦 教育学部長・阿山みよし 工学研究科長・の大学側6名と事務局担当者5名、志村なぎさ 国際学部同窓会副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林哲夫 同副会長・増渕茂泰 同副会長・竹井誠 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・清水由行 工学部同窓会会長・上澤和彦 同副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長・杉田昭栄 同理事長の同窓会側10名でした。議事内容は、協議事項として、特になし。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 朝刊(平成29年1月3日発行)1面に、「新設学部のまちづくり「演習」 18

年4月開始予定 市町と具体的調整へ」と題して、「地域に入り課題解決 骨格固まり 準備本格化」の内容で、地域デザイン科学部附属地域デザインセンターのコーディネーター**坂本文子**さん(国際学研究科国際社会研究専攻第5期生)のコメントが掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 毎日新聞 朝刊(平成28年10月4日発行)24面に、「イスラム文化を正しく佐野の中学生に伝える マレーシア人留学生が授業」と題して、**バシラ・アムラン**さん(国際学部2年)のコメントが掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成28年10月12日発行)4面文化欄に、「峰キャンパスでハラール食提供 宇大」と題して、宇都宮大学ハラール研究会会長の**友松篤信**先生と**ヌル・シャフイナス**さん(国際学部4年生)らのコメントが掲載されました。
3. 朝日新聞 朝刊(平成28年10月23日発行)27面に、「複数言語による高校進学説明会 宇大峰キャンパス」と題して、**HANDSプロジェクト**の記事が掲載されました。
4. 下野新聞 朝刊(平成28年12月2日発行)4面に、「外国人 本県で働く環境は 宇大でシンポ 労働調査を報告」と題して、**田巻松雄**先生のコメントが掲載されました。
5. 読売新聞 朝刊(平成28年12月13日発行)31面に、「翻訳アプリ学校でも出番 外国人児童・生徒急増 小山で実証実験へ」と題して、**若林秀樹**先生の記事とコメントが掲載されました。
6. 下野新聞 朝刊(平成29年1月19日発行)4面に、「国際学部長に佐々木氏選出 宇大、4月から」と題して、**佐々木一隆**先生の記事が掲載されました。

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. 韓国語と韓国文学 2017年4月15日(土)・16日(日)1時限～4時限
丁貴連先生(国際学部教授)
2. フォーマルイングリッシュを学ぶ 2017年6月3日(土)・4日(日)1時限～4時限
高際澄雄先生(国際学部名誉教授)
3. アメリカ経済論 2017年5月20日(土)・21日(日)1時限～4時限
磯谷玲先生(国際学部教授)
4. イギリスの文化 2017年4月22日(土)・23日(日)1時限～4時限
出羽尚先生(国際学部講師)

○刊行案内

1. 『国際学部研究論集』第43号(2017年2月)に、**タンティミビン**さん(博士後期課程 国際学研究専攻 第9期生)の論文が掲載されました。
タンティミビン 「ベトナム人居住集中地域における小規模ベトナム語教室の学習・

指導について ―在日ベトナム人の子どものバイリンガル教育を育てるために― 179~195 頁

*** 『HANDS next―とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ**

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第22号(2017年2月7日)

今年度事業および2回の協議会報告

国際学部長 HANDS プロジェクト代表 **田巻松雄**

「多言語による高校進学ガイダンス」開催報告

国際学部附属多文化公共圏センター **船山千恵**

外国人であること

国際学部1年 **アギーレ マリエル ナルミ**

平成28年度子ども国際理解サマースクール報告

国際学部附属多文化公共圏センター **船山千恵**

サマースクールを終えて

第1日目担当：国際学部3年 **小泉晴香**

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記18

外国人児童生徒支援の難しさとボランティアをすること

国際学部2年 **椎名史織**

「AMAUTA (アマウタ)」の子どもたちから学んだこと

国際学部4年 **斎藤柊奈**

学びの教室 私が出来る小さなこと

国際学部2年 **中澤 咲**

真岡市での「イヤーエンドパーティーに参加して」

国際学部1年 **染谷 心**

事務局だより

―平成28年度の活動―

―関係機関からのお知らせ― 授業に役立つ！JICA 国際理解教育支援事業のお知らせ

研究室訪問 46 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第46号は地球文化形成研究講座所属の**渡邊直樹**先生にお願いしました。

「企画広報の仕事」

渡邊 直樹

わたくしの宇都宮大学在職中は大学を取り巻く教育研究環境が大きく変化した。ポジティブに言えば、大学改革が大いに前進したのである。

宇都宮大学国際学部は 1994 年 10 月に創設されたが、この背景には大学設置基準の大綱化(1990)により、専門教育と教養教育の区分がなくなるなど大学の制度的見直しがある。と同時に、日本社会の国際化と PC による情報化が、大学の教育研究に変化を促したことも与って力があつた。「卵が先か、鶏が先か」の議論ではないが、大学制度と大学の教育研究内容の見直しが、宇都宮の地に「なぜか国際学部を誕生させた」のである。

10 年後の 2004 年には国立大学が法人化された。各大学は画一的ではない、新たな独自の理念のもとで教育研究と大学運営とを追究することになる。地域の「知」の拠点として大学は、地域との連携や教育研究上の「強み」などの特徴、いわば「個性」を発見し、それを広報する「見える化」(可視化)に注力せざるを得なくなる。各大学が有する「教育研究力」が学生ばかりでなく、地域にも還元されることが求められた。

大学の組織運営も見直されることになる。教員や学生数に応じて国から配分されていた大学の「運営経費」が、教育研究業績・地域貢献度・組織運営の合理化に係る大学の自助努力等それぞれの評価に応じて配分額が決定されるなど、成果主義が導入された。「学術の府」としてむしろ閉鎖的であった国立大学は、法人化によって促された「個性」化の流れに棹さし開放化へと向かう。

このとき、大学経営に四苦八苦していたとしても、少なからぬ自己主張のための「ノウ・ハウ」を有していた私立大学が模範となった。国立大学がすぐさま模倣可能であったものは、各界ですでに活躍している同窓生・卒業生を大学の「ステークホルダー」(stakeholder)として取り込むことであつた。有名人であれば大学のさまざまな、かつ強力な「広報の助っ人」としての役割を担ってくれるものと期待されたのである。これら同窓生・卒業生に「大学の現状と展望」とをアピールし、協力関係を構築するための具体的手段となつたのがすでに多くの私立大学が実施していたイベントであるところの「ホーム・カミングデー」である。

企画広報担当理事であつたわたくしは、宇都宮大学で初めての取組となるこの「ホーム・カミングデー」の、まさに企画立案・開催運営の重責を担うこととなつた。国際、工、農、教育の各学部の先生方や事務組織ばかりでなく、各学部等同窓会の代表の方々にも参加をお願いし、半年前から月に一度のペースで「実行委員会」をもち、イベントのプログラムやそれに係る経費を含む必要事項等を審議し、まさに「合意」を形成し開催へとこぎつけた。2010 年 4 月 29 日(みどりの日)のことである。

幸いにも各学部等同窓会、各学部教員、事務局等多くの方々から全面的協力を得て、この日、まずまずの天候にも恵まれ、90 歳にならんとする栃木師範学校時代の卒業生から、つい最近の卒業生にいたるまで 800 名近い宇都宮大学同窓生に「大学へお帰り」いただいた。プログラムも滞りなく終了し、参加者を最後にお見送りした後の安堵感を記憶してい

る。「ホーム・カミングデー」が開催できたことは、こと経費について各学部同窓会や同窓生の方々の多大なご協力の賜物であることを、またここに記して感謝申し上げておかなければならないであろう。とまれ、「ホーム・カミングデー」は定着し、同窓生・卒業生のみなさんには宇都宮大学・各学部等のために、多方面で大変ご尽力いただいている。

ところで、企画広報担当としていろいろなイベントやシンポジウムに取り組んだ。全学行事としては<宇都宮大学創立60周年記念シンポジウム>、大学コンソーシアムとちぎ主催の<栃木県の観光開発に係るシンポジウム>、<東日本大震災に係るシンポジウム>、毎年の<大学説明会>等を企画・実施した。こうしたイベントやシンポジウムを企画立案・準備することにおいて多くのことを学んだ。それぞれ目的・内容の明確化、関係者（パネリスト・参加者）の選定と依頼、会場手配と配置等、開催に至るまでの準備が、終了後の記録と報告書の作成ももちろんであるが、重要であり、かつ大変なのである。実際に動いてくれるのは事務の方々であり、パンフレットやパネル作成、準備作業、当日の案内など、いわば、これら「裏方」の人たちの働きなしにはいかなるイベントも開催できないことはいうまでもない。しかも、当日は休日であることが多いのである。やはり、ここで一言お礼を申し述べておかなければなるまい。

頭のなかでは、確かに興味深い企画であり、計画も順当であり、参加者も多数期待できると我田引水「良いこと」ばかりを考えるのだが、それでもなおこれらイベントで一番の心配の種は、実は参加者の数、動員数であり、このことがそれぞれの取組に関して成功か失敗かの一評価基準となる。広報紙やチラシ、ホームページによる案内ではなかなかお集りいただけない。電話であれ、ホームページであれ「予め参加申し込みを受け付け……定員になり次第……」などという、これまた仕舞うことが大変である。結果の評価はさておき、これらイベントやシンポジウムには、広報活動の成果か、パネリストや討論者として同窓生や地域の方々に多くご参加いただき、貴重なご意見をうかがう機会ともなった。「広報」とは一方的情報発信のシステムではないのである。

宇都宮大学は、栃木県内大学間の連携協力協定である<コンソーシアムとちぎ>をはじめ、栃木県や宇都宮市等地域自治体、経済団体（経済同友会等）、国際交流・文化団体（栃木県国際交流協会等）、プロスポーツ団体（栃木 SC 等）とも連携協力協定を締結している。そして、相互に有益な連携が図られている。「知の発信・広報と協働・創造の場」である「U.U.プラザ」の存在や大学グラウンドの開放等、宇都宮大学と地域とは十分ウィン・ウィンの協力関係を構築している。これら連携先は大学のステークホルダーでもある。大学の「知的財産」は地域によって、一方、地域が有する多様な財産は大学によって相互に批判的検証がなされ、精選され協働を経て創造的生産へ、イノベーションへ、ベンチャーへ、街おこしへと結びついていくのである。

この意味で、イベントやシンポジウムの開催、ホームページや SNS を介した大学の「広報」活動は「知らせたい情報を発信」するだけでなく、「知りたい情報を収集」という役割も担っているのである。企画広報担当の仕事は、まさにわたくしの知的財産となっ

たのである。

(2017年4月25日原稿受理)

博士録 40 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 40 回目には磯谷研究室 OG の苗 苗さんにお願ひしました。

「中国における SPA の生成に関する一考察 —アパレル製造業 2 社と服飾品卸売業 1 社を素材として—

立命館大学大学院経営学研究科

企業経営専攻博士後期課程

ふりがな ミヨウミヨウ

氏名 苗 苗

本論文は、1979 年から 2013 年にかけて、中国の大手アパレル製造業 2 社とスポーツの服飾品卸売業 1 社の SPA の形成プロセスを明らかにすることを目的としている。3 社の発展プロセスと先行研究をふまえると、SPA の普遍性は「小売を起点とする生産・流通システムとブランド構築との相互連関性」に求めることができる。

SPA は GAP により発表された自社モデルの略称である。直訳すると「アパレルのプライベート・ラベルの専門店小売業」となる。日本で、SPA は「アパレルの製造小売業者」または「製販統合型アパレル」として捉えられており、自社商品の企画から製造、小売まで一貫してコントロールする製造小売業のことだと理解されている。

先行研究は、SPA を「小売を起点とする SCM」と「ブランド構築」という 2 つの視点で、それぞれの考察を行っていた。SPA に関する多様な見解をふまえ、本論文では、SPA を「自社ブランドの製造直販小売業」に求め、新たな業態としてとらえている。いわゆる、SPA は自社ブランド商品の企画・製造・物流・小売にかかわる全プロセスを小売の視点により管理する製造小売業だと理解している。

本論文は、歴史的な視点から中国のアパレル企業 3 社の発展プロセスをとらえ、経済環境の変化の中で、生産・流通システムとブランドの変遷を考察することを研究方法としている。

研究対象となる 3 社は、2000 年代以降小売機能の強化をふまえた SPA に取り組んで、小売直営店の構築を通じて、自社ブランドをローカルの製品ブランドから全国に広がる製品・小売ブランドへと拡大させ、急速な成長を遂げた。2013 年現在、3 社は中国における最大の紳士服、カシミア製品、スポーツの服飾品の製造小売業であり、それぞれの商品分野において大きなマーケットシェアを獲得し、ブランドの知名度が高まっている。

3社の考察から以下の結論が得られた。第1に、小売起点の生産・流通システムが、生産・流通の全プロセスによるBI（ブランドアイデンティ）提案を支えると同時に、生産から小売までの全プロセスと結びついたBI提案が小売起点の生産・流通システムの生成を促すことを、3つの事例を通じて明らかにした。すなわち、SPAは小売を起点とする生産・流通システムとブランドとの相互作用の中で形成される。

また、3社のブランド構築の歴史をたどることにより、製品レベルのブランド構築から小売レベルのブランド構築に至るブランドの垂直的拡張が示された。製品・小売ブランドの成立を考えれば、製造業者、卸売業者または小売業者は単に製造・小売の統合だけではなく、小売の視点からBIにかかわる原材料の調達、商品の企画、生産、物流、小売などの全プロセスを設計・管理することを通じて、製品・小売ブランドを設計する。製品・小売ブランドという概念を用いれば、企業の戦略的な視点でブランドを拡張させるプロセスないし手段を見ることができる。

第2に、SPAが中国で生成した歴史的プロセスを示すことで、中国のアパレル製造小売業の生成を理解する一方、SPAの多様な形態の生成およびSPAの普遍性を示したと考えられよう。

第3に、本論文は、アパレル企業、さらには生産・流通の有効性とブランド価値を図る企業に対して、SPAを1つの戦略的手段として提示している。その中で、事業の出発点と製造・小売の管理手法により、多様なSPAが形成され、異なる競争優位が生まれることを示すことができた。

（国際学研究科 国際社会研究専攻 第11期修了生）

（2017年3月6日原稿受理）

*編集者注：SPAとは“speciality store retailer of private label apparel”の訳語の一つで、日本語では「製造小売業」とされる。

博士録 41 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第41回目には田巻研究室OBの仲田和正さんをお願いしました。

「持続可能な人道支援には何が必要か」

仲田 和正

私は、25年前の1991年6月に発生した、20世紀最大規模といわれるピナトゥボ火山噴火の被災地域に対する緊急人道支援活動に、国際ロータリー2550地区の国際奉仕委員として関わった。国際ロータリーは、今から100年以上も前の1905年にアメリカで創設され、現在200カ国以上の地域に約34,500のクラブと120万人を超える会員を有し、国連にも匹敵する規模を持つ世界的な奉仕団体である。私は、10数年間に亘り国際奉仕委員として人道支援活動に関わっていく中で、様々な課題やジレンマに直面し、自らの判断で組織を離脱した。その後、これまで実践してきた人道支援活動を継続するために、新たな活動拠点とな

るNGOをフィリピンに設立し、現在も実践者として様々な人道支援に携わっている。

本論文は、実践者が人道支援を通して直面した課題や、対峙してきたジレンマに着目し、極めてシンプルではあるが大きなテーマを掲げて検討を行った。

論文題目：持続可能な人道支援には何が必要か

論文の要旨

本論は、「持続可能な人道支援」を実践するためには「何が必要か」という問題意識に基づき、人道支援に関連する先行研究のレビュー、国連高等弁務官事務所（UNHCR）、国際赤十字社・赤新月社連盟（IFRC）、国際NGOの国境なき医師団（MSF）等の実践者に対するインタビュー調査、国内外の先駆的NGOを対象とするフィールドワーク、被災地や貧困地域を活動拠点とするローカルNGOへのアンケート調査等を通じて、持続可能な人道支援の継続に必要なエレメントの明示を試みた。

人道支援のジレンマと対峙してきたNGOや、人道支援のパートナーシップに起因する課題や限界に関する研究では、どれだけ「周辺」に迫って実情を捉え実証してきたのか、或は、何故「周辺」にアプローチすることができなかつたのか、既存の研究手法と問題点を整理することが重要と指摘した。ジレンマを分析するための視点として、「周辺」と「中心」が対峙する相対関係を基軸に据え、実践者に対するインタビューを通してジレンマの実態と特徴について検討を行った。「周辺」がドナー「中心」のフレームワークに依拠した援助を求める限り、持続可能な人道支援に限界と課題を残していることを明らかにした。

人道支援を継続していくためには、受益者をベースとするマルチラテラルなネットワークと、マルチステークホルダー・エンゲージメントの概念を重視した、より柔軟性、適応性、融通性のあるマルチパートナーシップが、不可欠なエレメントであることを指摘した。「持続可能」には、マルチラテラルなパートナーシップとマルチステークホルダー・エンゲージメントによるフレームワークの構築、受益者を中核とするトライパタイト・アプローチの組織作り、自助資金の創出、実践者の育成、人道支援プログラムの実現といった要因が深く関係していた。

人道支援の領域においては、「中心」の専門的な知識に加え、「周辺」に精通した実践者の知見をコンバインすることが極めて重要である。研究者は、「中心」の偏狭な専門領域に固執することなく、最も「周辺」に置かれた弱者と直に接して学ぶという機会を積極的に作りながら、実証的・理論的な研究を発信することが求められる。実践者は、狭隘（きょうあい：心が狭く度量が小さい）な現場主義に陥ることなく、現場から得られる豊富なデータを積極的に発信し、支援活動の意義や課題に対する声に真摯に耳を傾ける必要がある。実践者と研究者のコラボレーションは、「周辺」と「中心」が相互に協力することで得られる。

「持続可能な人道支援には何が必要か」という課題に対して論点を整理し、「常に周辺を重視する現場第一主義をモットー」とするポリシーに基づく学術研究のメリットや学術的意義を明確に主張した。さらに、人道支援に関わる組織と実践者に求められるキャパシティーとして、Correct (修正・中和)、Connect (連結・接続)、Coordinate (調整と協調)、Compose (構成・組織化)、Conduct (運営・指導・実施) の FCE (Five Control Element) が肝要であることを提言した。

後輩への助言

私が参考とした「Francis, J.R.D. (1976) Supervision and examination of higher degree students, *Bulletin of the University of London*, 31:3-6」は、何が論点で、課題が何処にあるのかを示す「背景となる理論」、何をどういう理由から研究するかを明確に主張する「焦点となる理論」、主張をサポートするために使う材料の関連性と妥当性を証明する「データ理論」を、博士論文に求められる必須要件と述べている。

また、博士論文は「知へのオリジナルな貢献」として、「過去になされたことのない実証を行う」、「新たな根拠で過去の研究を補足する」、「これまで試みられなかった研究手法を用いて新たな知識を追加する」など、創意に富むアイデアが求められます。

論文のタイトルは、研究の核心を突くオリジナリティー溢れるタイトルを考え、無味乾燥な有り触れた表現は避けましょう。論文の内容を的確に表すタイトルを考える作業は、難しく大変と思いがちですが、意外と楽しいものです。タイトルが決まると、研究目的に沿って章立てなどの枠組みが、具体的に立てやすくなります。さらに、必要な先行研究の見極めや、研究手法の選択も容易になるでしょう。

博士論文の作成には、研究分野の領域における文献の検索や、フィールドワークに基づくデータの集積および分析など、幅広いアプローチを用いた研究活動を積極的に行うことが、重要であると考えます。何を必要とし、何をするのか、自らの責任で決めていく自己管理能力が求められます。皆様の健闘を心よりお祈り申し上げます。

今後は、「知へのオリジナルな貢献」をするため、国際会議などでの研究発表や英語論文の執筆など、できるだけ早い時期に実現できるよう引き続き研究を進めていきたいと思えます。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第3期修了生)

(2017年3月9日原稿受理)

知究人 31 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 24 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 19 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 11 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2017 年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

国際学部学位授与式から

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。なお、特別賞は国際学部同窓会副会長の**志村なぎさ**さんより授与されました。

国際学部

・総代 1 名

- ① 大和優希「マラソン大会復興と地域コミュニティの変化ー東日本大震災の経験からー」
柄木田研究室

・最優秀賞 1 名

- ① 宮平睦月「日本に対する沖縄の住民意識とその複雑性」清水奈名子研究室

・優秀賞 4 名

- ① 飯山ももこ「Yellow Magic orchestra の『アジア表象』を通してみる日本」松金研究室
② 伊勢万梨乃「『仮埋葬・改葬』からみた現代日本の宗教意識」松金研究室
③ 清野 茜「日瑞における LGBTQ 当事者の脱マージナル化」高橋若菜研究室
④ 東野朱音「神楽とまつりー西米良での生活からー」古村研究室

・特別賞 3 名

- ① 秋元 愛「御大典を『祝う』ということ」松金研究室
② 佐藤史織「ドイツにおける市民の環境活動の多様性」高橋若菜研究室
③ 丹治真奈「多様な学びを保障する公立夜間中学」田巻研究室

国際学研究科学位授与式から

2013(平成25)年度より、学位記授与式において修士論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・学生賞1名

- ①梁 鎮輝「近代日本文学における「中国」の包摂 ―露伴、道教文学を事例に―」
松金研究室

・最優秀賞1名

- ①伊藤和也「学校教育に対する積極性とインセンティブに関する一考察」 阪本研究室

・優秀賞1名

- ①梁 鎮輝「近代日本文学における「中国」の包摂 ―露伴、道教文学を事例に―」
松金研究室

●お知らせ

第5回宇都宮大学ホームカミングデー開催予定！ **2019（平成31）年秋**

大学祭の「峰ヶ丘祭」開催期間中に開催予定です。また、3年ごとの開催に変更になりました。詳細は後日改めてお知らせします。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の21号の内容は、1イタリア 男子代表チームに女性監督誕生 2 EU支部だより ―エトナ山またも噴火―です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●今回のニュース編集にあたり、多くの困難な要因が重なってしまい発行が大幅に遅れたことをお詫びします。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP**

(<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@freeml.com
